

〈破碎語彙〉 コボル・コボツ・ヤブル (下二・四)・クダク (下ニ・四) の語義と 『今昔物語集』における「壊」の訓釈小考

馬 吳 穎

キーワード：『今昔物語集』、コボル、コボツ、ヤブル (下二・四)、クダク (下ニ・四)

一 はじめに

院政期に成立した『今昔物語集』(以下、『今昔』とのみ記す)は、中古・中世における日本語の語彙と文体の関係について研究を行う際の貴重な資料であり、なお、さまざまな日本語史上の問題を提供してくれる資料でもある。

研究が進んだ現在でも、各注釈書の間には漢字表記語の訓のゆれが見られ、読みが確定していない語彙が少なくない。訓の確定は、今昔の読解はもとより、広義の古代語の語彙と文体の研究にとっても、基礎的で重要な作業である。

本稿では、そのような今昔の訓釈研究、ひいては、日本語史の研究の一環として、『今昔』における、言わば〈破碎語彙〉とでも名付けうる「コボル・コボツ・ヤブル(下二・四)・クダク(下ニ・四)」を表していると考えられる漢字表記語彙「壊」を取り上げる。具体的には、それらの漢字語彙について代表的な5つの注釈での訓釈異同表を提示し、そこに見られる異訓から、『今昔』での訓釈の問題について論じることしたい。

なお、訓を確定していくためには、各語の語義について検討するという作業も必要であるので、類義語語彙の語義比較も取り上げる。今回は論点を絞るために、訓釈異同表の中でも、特に訓のゆれがある「コボル・コボツ・ヤブル(下二・四)・クダク(下ニ・四)」に焦点を絞って取り上げ、各語の意味分析を行って訓を検討することにした。

なお、5つの注釈書は、次のものであり、以下ではカッコ内の略称を用いて示す。岩波書店の『新日本古典文学大系』(新大系本)、『日本古典文学大系』(旧大系本)、小学館の『新日本古典文学全集』(新全集本)、『日本古典文学全集』(旧全集本)、新潮社の『日本古典集成』(集成本)。

(47)

二 問題の所在

『今昔』の巻1から巻31において、新大系本では、「壊」という漢字に、例えば以下の例のように、コボル・コボツ・ヤブル（下二・四）という異なる訓がふられている。

- ・巻2第15話 其ノ時ニ崩シ壊レタル塔有リキ。(コボル)
- ・巻14第4話 其ノ約ヲ不違シテ墓ヲ壊ソニ、何ノ故□蛇此ヲ不去ザルゾ」ト。(コボツ)
- ・巻7第28話 前ニハ江ヲ渡ルニ、船壊レテ水ニ入ルト云ドモ死事無シ。(ヤブル下二)
- ・巻12第1話 我レ、此レヨリ後、更ニ此ノ塔ヲ壊ル事不有ジ」ト。(ヤブル四)

新大系本の本文において、「壊」という漢字を使用し、動詞を表していると考えられる語に、上記の破砕語彙の訓が付された例数は以下の通りである⁴¹。

コボル	11例
コボツ	13例
ヤブル（下二）	16例
ヤブル（四）	16例

これら新大系本の箇所全てを、他の四つの注釈書で確認したところ、ヤブルの箇所に

〈表1〉 コボル（新体系本）

	巻	話	本 文
A	19	23	其レニ、此ノ寺ハ我レ死ナバ、後ニハ亦ノ日荒テ、人ホロサモ無ク成ナムトス。堂モ壊テ時ノ間ニ失セ、仏モ人ニ被盜レナムトス。
B	28	30	茂経、此レヲ見テ、「哀レ、飛ガ如クニ詣来クル童カナ」ト云テ、俎ノ上ニ荒卷ヲ置テ、事シモ大鯉ナドヲ作ラム様ニ、左右ノ袖ヲ引䟽テ、片膝ヲ立テ今片膝ヲバ臥テ、極テ月々シク居成シテ、少喬ミテ、刀ヲ以テ荒卷繩ヲフツへト押切テ、刀シテ藁ヲ押披タルニ、物共泛レ落ツ。見レバ、平下駄ノ破タル、旧尻切ノ壊タル、旧藁沓ノ切タル、此様共ホロへト泛レ出ヅ。
C	28	30	主達、「然テハ可為キ様有」ト云テ、荒卷ヲ取下シテ、鯛ヲバ皆取出シテ切食テ、其替リニハ、破タル平下駄ノ片足ヤ、旧尻切ノ壊タルヤ、旧藁沓ノ切タルナドヲコソ、求メテ籠テ被置ルト聞侍ツレ」ト語レバ、茂経此レヲ聞テ、嘸リ喰ル事無限シ。
D	31	3	今昔、鳥羽ノ村ニ大キナル橋有ケリ。此レハ、昔ヨリ桂川ニ渡セル也。其ノ橋壊レテ、人渡ル事無カリケリ。

〈表2〉 各本との比較

巻	話	旧体系本	新体系本	旧全集本	新全集本	集成本
A	19 23	ヤブル	コボル	コボル	コボル	コボル
B	28 30	コボル	コボル	ヤブル	ヤブル	ヤブル
C	28 30	コボル	コボル	ヤブル	ヤブル	ヤブル
D	31 3	ヤブル	コボル	コボル	コボル	コボル

〈表3〉 コボツ (新体系本)

巻	話	本文
E	11 22	其後、堂ヲ造畢ヌ。供養ノ日、暁ニ仏ヲ渡シ奉ルニ、仏ハ大キニ、堂ノ南ノ戸ハ狭シ。今一二寸広カラムニ、撰仏可入給キ様無シ。「是ハ、今三尺計広サモ高サモ仏ハ過給ヘルハ。可為キ様無シ。喬ノ壁ヲ壞テコソハ入レ奉ラメ。
F	11 32	其時ニ、延鎮、將監ト同心ニシテ、カヲ合セテ、彼所ニ岸ヲ壞テ谷填テ、伽藍ヲ始テ建ツ。

〈表4〉 各本との比較

巻	話	旧体系本	新体系本	旧全集本	新全集本	集成本
E	11 22	ヤブル	コボツ	ヤブル	ヤブル	コボツ
F	11 32	コボツ	コボツ	クダク	クダク	コボツ

は訓のゆれがなかったが、コボル〈表1、表2参照〉とコボツ〈表3、表4参照〉の箇所では、少数ながら異訓があった。〈表1〉はコボル、〈表3〉はコボツの新大系本の用例であり、〈表2〉と〈表4〉は各注釈書との比較を表したものである。〈表4〉のFの訓に注意されたい。旧全集本・新全集本にはクダクの訓もふられていることがわかる。

本稿では、以上のような「壊」の訓として使われているコボル・コボツ・ヤブル(下二、四)・クダク(下二、四)について、五つの注釈書を手掛りに「壊」の用例を検討し、訓の揺れている部分について、いずれの訓が妥当であるかを訓の意味に焦点をあてて考察する。

考察の具体的な手法としては、『今昔』及びそれとほぼ同時代の和文資料に見られるコボル・コボツ・ヤブル(下二、四)の意味分析を行い、各語の意味の相違を明確にし、各語の意味用法から見て、今昔の当該箇所においては、いずれの訓が文脈にふさわしいかを判断していくことにする。なお、〈表4〉のFでわかるように、旧全集本・新全集本では「壊」の訓としてクダクが使われているため、クダクの用例も併せて検討す

(49)

る必要がある。しかし、新大系本には「壊」という漢字の訓としてクダクが使われていないため、『今昔』と同時代の和文資料の用例を分析し、考察を行う。

三 先行研究と辞書記述

三一 1 先行研究

まず、先行研究での解釈を確認しておくことにする。本稿と関連する先行研究は木下(1964)、迫野(1996)、橋本(2007)がある。なお、水、涙等の液体が溢れる・流れるという意味を持つコホルがある。これは、破壊するという意味とは違って、液体のようなものが何かから溢れ出るということの意味するもので、これを破砕語彙と一緒に扱う先行研究はない。木下(1964)は、「「溢れる」と「毀れる」の二種が二原より出たもので単なる他人の空似と片付けるのは危険であらうが、さりとて、一原に出たものが中昔に分流し、ことに清濁を異にし、また交錯、浸食して今日に至ったと見るにはよほどの用意があるはずである」(p. 55)と曖昧な結論に終わっている。本稿では、この液体の溢れる状態を表すコホルは別の語彙であると考え、取り上げないことにする。

迫野(1996)は、コラス(毀)の成立に関するもので、意味について詳細に述べたものではなく、主に語形変化(コホル(自)ーコヲルーコワル、コホツ(他)はコヲツとコラスの二つに分かれ、コヲツはコボツに、コラスはコボスとコワスに変化)(p. 75)にかかわる問題について考察を行っている。

橋本(2007)では、平安・鎌倉時代の文献でのコホル・コホツ²⁾について述べられている。コホルは他動詞コホツに対する自動詞形とし、自・他の関係にある二つの動詞の意味について考察を行っている。

これら三つの先行論文の中で、特に本稿と関連すると考えられる橋本(2007)の解釈を確認しておきたい。橋本(2007)は、「コホル・コホツの理解」(p. 30)で次のように述べている。まず、「コホツ」については(辞書での意味分類を参考に)、①②③の用例を挙げ、以下〈表5〉(p. 34)のように整理している。

①(常陸坊昌命ガ)人ヲ入レテミスルニ、彼ノ家ニモ(源行家ハ)ナカリケレバ、込

〈表5〉

	意 味	用例
I	破損・損壊させる、破壊する。	①
II	解体する、ばらばらにする。	②
III	くだく、小片にする。	③

籠ヲ打破り、板敷ヲ放テ天井ヲコホチテサガシケレドモ、不見ケレバ、(『延慶本平家物語』)

- ②六波羅には、五條の橋をこほちよせて、かいだてにこしらへてまつところに、義朝押よせ、時をどつとつくる。(『平家物語』)
- ③(左兵衛尉は)水ヲ汲ミ入テ、コシバガキヲコホチ、大床ノツカ柱ヲワリナムドシテ、トカクシテ御湯シイダシタリケレバ、(『延慶本平家物語』)

次に、コホルについては、④⑤の用例を取り上げ、「殆どにおいて「破壊・損壊する」という内容を表していると考えて文脈上、齟齬をきたすことはない」(p. 32)とし、コホルは「コホツのⅠ破壊・損壊させるという点是对応しているが、ⅡやⅢに対応するようなものは認めがたい。」(p. 34)と述べられている。

- ④また、としこ、雨のふりける夜、千兼を待ちけり。雨にやさはりけむ、来ざりけり。こほれたる家にて、いといたく漏りけり。(『大和物語』第六十七段)
- ⑤此仏種房、ある時風気ありて煩ひけり。かたのやうなる家、あれこほれてつくろふ事なし。(『発心集』)

* (①②③④⑤：橋本(2007)により)

〈表6〉

コホル	「 <u>作られたもの</u> 」が主体となり、その形が失われたことを表す。
コホツ	「 <u>作られたもの</u> 」を対象にとり、その形を失わせる

以上の理解をもとに、両語を〈表6〉(p. 36)のようにまとめている。

橋本(2007)は、「作られたもの」という点に着目しているものの、それが具体的にどのように「作られたもの」なのかという点については明らかにしていない。さらに、コホル・コホツの二語の比較で得られた結果は、自動詞の場合は「主体」、他動詞の場合は「対象」という相違のみで、それは一般の自・他動詞の相違点と同様であると考えられる。なお、その相違点のみでコホル・コホツの意味を確定するのは、十分とはいえない。

以上の先行研究を踏まえた上で、本稿では、コボツ・コボルの類義語であると思われる動詞ヤブル(下二、四)、クダク(下二、四)との比較を通じ、「壊」の訓について考察する。

三ー2 辞書の「コボル・コボツ・ヤブル(下二・四)」の記述

コボル・コボツ・ヤブル(下二・四)についていくつかの辞書の記述を見ておきた

(51)

〈表7〉

	辞書	意 味
コボル	角川	<u>こわれる</u> 。くずれる。おもに建造物に関して用いる ^{※3} 。 「こほれたる家にて(雨が)いといたく漏りけり」
	日国2	破れくずれる。 <u>こわれる</u> 。かけ損じる。
	小学館	<u>壊れる</u> 。破損する。
	岩波 ^{※4}	<u>壊れる</u> 。
コボツ	角川	取りこわす。 <u>破壊する</u> 。おもに建造物についていう。
	日国2	とりこわす。 <u>破壊する</u> 。うちくずす。くだく。
	小学館	壊す。打ち破る。崩す。
	岩波	音を立ててこわす。
ヤブル (下二)	角川	ものが壊れ、損なわれる。家、国が滅亡する。
	日国2	<u>破壊される</u> 。布や紙などが裂ける。i 敗北する。ii 身に傷を負う。iii
	小学館	こわれる。くだける
	岩波	<u>固いもの、纏まりあるもの</u> 、運勢などが、くずれ、こわれ、つぶえる。
ヤブル (四)	角川	ものを壊し、損なう。 <u>破壊する</u> 。家、国を破滅、滅亡させる。
	日国2	<u>破壊する</u> 。体に傷をつける。iv 守るべきことを守らないで無視する。v
	小学館	<u>こわす</u> 。くだく。
	岩波	<u>固いもの、一つに纏まっているもの</u> などの一部分を突いて傷つけ、その <u>全体をこわす意</u> 。

い。主に『日本国語大辞典第二版』『角川古語大辞典』『小学館古語大辞典』『岩波古語辞典』の記述を用いる。(以下、『日本国語大辞典第二版』:日国2 / 『角川古語大辞典』:角川 / 『小学館古語大辞典』:小学館 / 『岩波古語辞典』:岩波とする)『今昔』の訓の考察にかかわる範囲で抜粋し、以下の表にまとめた。

〈表7〉を見ると、コボル・コボツ・ヤブル(下二・四)については、どの辞書も意味については大同小異であるが、各語の意味を便宜的にまとめる(波線が引いてあるところ)と次のようである。

- 1) コボル:こわれる(角川、日国2、小学館、岩波)
コボツ:破壊する(角川、日国2)

2) ヤブル (下二) : 破壊される (日国 2) という意味以外に、i · ii · iii⁸⁵ の意味がある。

ヤブル (四) : 破壊する (角川、日国2) という意味以外に、iv · v の意味がある。

ヤブル (下二・四) の場合は、コボル・コボツと共通する「破壊する・破壊される」という意味以外の意味がある。それは以下の『今昔』の用例からも確認することが可能であるため、ヤブルの方がもっと広義に使われていたと解釈できるといえよう。

四 『今昔』の表記別コボル・コボツ・ヤブル (下二・四) の用法

『今昔』のコボルとヤブル (下二) の主体、コボツとヤブル (四) の対象を用例から抜粋し〈表8〉にまとめ、数字で示した。本稿では、各語の本来の意味を考察し比較した上で、訓を確定することにしたい。そのため、複合動詞は考察対象から外した⁸⁶。

〈表8〉を見ると、コボル・コボツとヤブル (下二・四) のそれぞれに接続する語彙は物理的に存在するものもあるが、それとは性質を異にするものもある。ここでいう性質を異にするものとは、例えば、「起請、国、軍」等の抽象的⁸⁷なものである。抽象的なものと共起する用法は、物理的なものを指す意味から抽象的なものへの意味拡張に⁸⁸よるものであると考えられるが故に、本稿では、先ず物理的なものを指す用例を分析し意味を確定した上で、抽象的なものについて触れることにする。物理的に存在するものを見ると、全てが人の手が加わっており、組み立てにより作られた構成物であるということがわかる。このような語彙を主体ないし対象とするコボル・コボツとヤブルは、はたして何を基準にして区別しているのであろうか。「塔、堂」等の同じ対象に使われている場合、その使い分けには何らかの基準があると考えられる。以下では、その基準について用例から検討したい。

まず、紙面上の制約もあり、自動詞のコボルと他動詞のコボツの用例を1例ずつ見ることにする。

〈表8〉

	コボル11	コボツ13	やぶる (下二) 16	やぶる (四) 16
語彙	所1、 <u>塔1</u> 、塔2、堂1、立部1、尻切2、寢殿1、橋2	社2、地獄1、 <u>玄関1</u> 、墓3、 <u>寺塔1</u> 、壁1、岸1、幕1、垣1、宝殿1	獄1、柱1、*身1、船2、*行い1、*軍1、塔1、繩1、仏堂1、堂1、寢殿1、*国1、寺1、縁側1、裾1	*起請2、身1、*形1、仏2、屋1、 <u>獄門2</u> 、塔3、 <u>蝻1</u> 、 <u>碁の石2</u> 、*事1

- ⑥巻30 4話 男モ、然コソ「糸惜」ト云ケレドモ、人ノ智ニ成ニケレバ、音信ヲダニ不為ザリケレバ、出テ其レモ云ハムヤ。來ル事ハ絶ニケリ。然レバ、様悪ク壊タル寢殿ノ片角ニ、幽ニテゾ独リ居タリケル。
- ⑦巻14 4話 大臣、其ノ後、多ノ人ヲ集メテ、忽ニ彼ノ女靈ノ教エシ墓ヲ尋テ、其ノ所ニ行テ墓ヲ令堀ニ、人此レヲ見テ云ク、「墓ヲ堀ル事、必ズ恐レ有り。此レ何ノ故ゾ」。然レドモ、大臣不憚ズ墓ヲ壊チ地ヲ堀ルニ、土ノ下ニ大キナル蛇、墓ヲ纏テ有り。

波線部はコボル・コボツの主体ないし対象（以下、主体ないし対象の「語彙」を単に「語彙」と記す場合がある）である。⑥は、「女はこわれた寢殿の片隅にみすばらしくひっそりとたった一人住んでいた」という意味であり、⑦は「大臣はかまわずに墓をこわして土を掘る」という意味である。⑥⑦の「寢殿」と「墓」は、自然にできたものではなく、人為的な組み立てによりできあがった構成物であるという共通点を有する。なお、これらは3次元的なものとして捉えられるという性質の強いと考えられる。つまり、人為的に作られた構成物で、3次元的に捉えられるものを指すということである。主体や対象をこのように見ると、〈表8〉で見たコボル・コボツの語彙も、この解釈と同様に、人為的に作られた構成物で3次元的なものという意味が共通していると見ることができる。このような解釈から、コボル・コボツは主体や対象を、「人為的に作られた構成物で、3次元的なもの（空間）に捉え」それに焦点を当てていると考えられる。

次に、ヤブル（下二・四）については、ヤブル（四）の対象の中では「（身・起請を）やぶる」のような心理的抽象的な例が多く、一方、物理的なものの用例の数が少ないこともあり、ヤブル（下二）の用例から2例見ることとする。

- ⑧巻26 17話 但シ、乗物コソ侍ラネ」と云ヘバ、利仁、「此ニ馬ハ候フ」トイヘバ、五位、「穴喜」ト云テ、薄綿ノ衣ニツ許、青鈍ノ指貫ノ裾壊タルニ、同色ノ狩衣ノ肩少シ落タルヲ着テ、下ノ袴モ着ズ、鼻高ナル者ノ、…（省略）
- ⑨巻24 27話 其家ヲ見レバ、旧ク荒テ人気無シ。屋共ニ皆倒傾テ、只煙屋許残タルニ、此人々壊タル縁ニ居並テ、月ヲ興ジテ詩句ヲ詠ジケルニ、…（省略）

ヤブル（下二）の主体である「裾」と「縁」は、まず⑧の「裾」を見ると、一般に「裾」というのは、その面的な性質をさきに思い浮かぶであろう。この面というのは、2次元的な意味合いが強いと解される。おそらく⑨の「縁」についても同様の解釈が可能であると考えられる。なお、これらに共通する性質というのも、「人為的に作られた

構成物」であるということである。このように見ると、ヤブル（下二）の主体に当たる語彙は、3次元的なものという意味を必ずしも有する必要性はなく、2次元的な面という性質が強い。また、自然に存在するものではなく、人為的に作られた構成物と解釈することができる。なお、ヤブル（下二）と対をなすヤブル（四）にも同様の性質が在るであろう。このような解釈から、〈表8〉で見た語彙についても同様の性質であると考えられる。つまり、ヤブル（下二・四）は主体や対象を、「人為的に作られた構成物で、2次元的なものに捉え」それに焦点を当てていると考えられる。

コボル・コボツ・ヤブル（下二・四）についてこれまで述べてきたことを整理すると、以下のような仮説を立てることが可能であると考えられる。

コボル：「人為的に作られた構成物」の3次元的な空間（全体或いは部分）に焦点を当て、その形が失われる。

コボツ：「人為的に作られた構成物」の3次元的な空間（全体或いは部分）に焦点を当て、他者の行為によりその形が失われる。

ヤブル（下二）：「人為的に作られた構成物」の2次元的な面（全体或いは部分）に焦点を当て、その形が失われる。

ヤブル（四）：「人為的に作られた構成物」の2次元的な面（全体或いは部分）に焦点を当て、他者の行為によりその形が失われる。

以下では、この仮説を基に、平安中期・後期と文に関してはどうなのか、見ていきたい。

五 和文資料

五-1 『古典対照語い表』

『古典対照語い表』でのコボル・コボツ・ヤブル（下二、四）の分布は、以下のようである。『古典対照語い表』によると、ヤブル（下二・四）の訓は源氏物語（平安中期）頃から使用されたことになる。〈表9〉の分布をもとに、コボル・コボツ・ヤブル（下二・四）の主体と対象を〈表10〉にまとめてみた。

〈表10〉のコボル・コボツ・ヤブル（下二・四）の語彙を見ると、まずコボル・コボツの場合は、「家、橋、神殿、塔」などの人為的に作られた構成物で、さらに3次元的なものとして考えられるものがあらわれている。一方、ヤブル（下二・四）の場合は、「的」と「障子」の人為的に作られた構成物ではあるものの、空間としては考え難い性質のものである。

ヤブルにおける「的」と「障子」は以下の例である。「的」はその紙が矢で破られる

〈表9〉

	徒	方	大	更	柴	源	枕	蜻	後	土	古	伊	竹	万
コボル ^{#9}				1		26	2	7	1			1		
コボツ		3		2		8	1						1	1
ヤブル (下二)	4	2	3			1								
ヤブル (四)	3	1	2			11								

〈表10〉

		コボル	コボツ	ヤブル (下二)	ヤブル (四)
語 彙	万		<u>仮慮</u> 1		
	竹		<u>あななひ</u> 1		
	枕		<u>雪の山</u> 1		
	源		<u>家</u> 1、 <u>塔</u> 1、 <u>壇</u> 3、 <u>寢殿</u> 2、 <u>葦垣</u> 1	*司召 1	*心 6、*遺言 1、 <u>障子</u> 1、*契り 1、*約束 1、*戒 1
	更	<u>橋</u> 1	*所 1、 <u>橋</u> 1		
	大			*事 1、 <u>的</u> 1、内裏 1	*戒 1、*制 1
	方		<u>家</u> 3	<u>家</u> 2	*境界 1
	徒			<u>物</u> 1、*他の事 1、*怪しみ 1、*心 1	*人 1、*身 1、*戒 1

のであるから2次元的把握である。「障子」は「障子」そのものではなく「障子の固め」という表現で、侵入を避けるために襖に錠を下ろした防御体制を表現したものであるから、いわば「城を破る」「敵を破る」などの抽象的表現と同じもので、意味的に派生した用法を見なすことができよう。

- ⑩…摂政関白すへきものならばこの矢あたれとおほせらるゝにはしめのおなしやうに的のやふるはかりおなしところにいさせたまひつ…『大鏡 (人)』
- ⑪心うつくしく語らひて、「なをかくもの思ひ加ふるほど過ごし、心ちもしづまりて聞こえむ」との給ふ。人にくゝ、けどをくはもて離れぬものから、障子の固めもいと強し。しみて破らむをば、つらくいみじからむとおぼしたれば…『源氏』

それでは、その他の平安中期・後期の和文作品には、破碎語彙のコボル・コボツ・ヤブル (下二・四) がどのように使われているかを分析し、「壊」の訓について検討した

い。

五一 2 和文資料

平安中期・後期の和文作品から、コボル・コボツ・ヤブル（下ニ・四）がどのように使われているかを見ていきたい。考察した平安中期・後期の和文作品は『夜の寢覚』『狭衣物語』、及びジャンルのには『今昔』に近い説話集であるが、文体的には和文系とされている『古本説話集』『宇治拾遺物語』（以下、『夜の寢覚』：寢覚／『狭衣物語』：狭衣／『古本説話集』：古本／『宇治拾遺物語』：宇治、と表す。）であり、これらの和文資料の用例に見られる破砕語彙のコボル・コボツ・ヤブル（下二、四）意味と、『今昔物語集』に見られる破砕語彙のコボル・コボツ・ヤブル（下二、四）の意味とを比較しながら、「壊」の訓について検討したい。〈表11〉は、コボル・コボツ・ヤブル（下二・四）の語彙の数を数字で示し、〈表12〉に物理的なものを示した^{#10}。

〈表12〉にまとめたコボル・コボツ・ヤブル（下ニ・四）の前に接続する物理的に存在する名詞にはそれぞれ異なる特徴を有すると考えられる。また、それは〈表12〉に見られた特徴と同様であることに気付くであろう。つまり、コボル・コボツの主体と対象には、「人為的に作られた構成物で、三次元的に捉えられるもの」が多いことがわかる。たとえば、「寢殿、家、橋」等がそれである。しかし、空間として捉え難い「板敷」が2例ある。

「板敷」の用例は次の文脈に現れる2例である。最初の例は直接的に「板敷」を「こぼち」ているようにも見えるが、2例目と文脈から解釈するに、妻戸口に敷いている板

〈表11〉

	寢覚	狭衣	古本	宇治
コボル	0	0	3	1
コボツ	0	1	2	5
ヤブル（下二）	0	1	0	5
ヤブル（四）	1	2	1	9

〈表12〉

		寢覚	狭衣	古本	宇治
語彙	コボル			築地1、堂1	寺1
	コボツ			寢殿1、壁1	櫓がき1、板敷2、堂塔1
	ヤブル（下二）		障子1		衣1、壁1、寺1
	ヤブル（四）				額1、垣2、家1

(57)

敷きを取り外し(「とりのけ」)、床面全体を取り壊して、妻戸口一間全体を土間にしてそこに死んだ人を埋めて塚にした、という話であるから、この「板敷」も、簀の子のような薄い2次元的なものと把握して破壊したというよりも、建造物の一部として(3次元的にとらえて)破壊した、と理解できるものであることがわかる。

⑫『宇治』巻3-15話

「たゞ、こゝにあらんとおぼすか。さらば、やがて爰にも置き奉らん。かくては、いとみぐるしかりなん」とて、妻戸口の板敷をこぼちて、そこにおろさんとしければ、いと軽らかにおろされたければ、すべなくて、その妻戸口一間を、板敷などとのけ、(引用者、妻戸口一間を) こぼちて、そこにうづみて、たかへど塚にてあり。

一方、ヤブル(下ニ・四)の主体と対象には、「人為的に作られた構成物で、2次元的に捉えられるもの」が多く見られる。しかし、ここでも「寺、家」のように空間として捉えられる用例がある。

和文資料のヤブルで2次元ではないと見られる例は、共に『宇治』の「家」と「仁和寺」の2例である。それぞれ、壁や外壁などの2次元的なものを表した可能性も皆無ではないが、暴風や長年の風雨による荒廃を考えると、必ずしもそのようなものだけでなく、3次元的な破損を考慮する必要がある。その点でコボツとの相違を説明しにくい。ただ、この2例に共通するのは、共に「家」や「寺」の「部分的な破損」という点であり、あまり全体的な破損には及んでいない場合の表現とみられる点である。コボツは、辞書にも「取り壊す」「破れくずれる」「うちくずす」などと解釈されているように、破壊の規模が大きかったり、全体的外観に及ぶような破損に使われる傾向が見られた。その点ではこの2例の破損や被害は、自然発生的でかつ部分的ないし軽微、あるいは部分的なものの集積という感じがある。これらのヤブルの例は、3次元のものの場合には、コボツとは規模や程度の相違が含まれることがある、と解釈しておくことにしたい。

⑬『宇治』巻13-8

牛のときの末より、俄に空かきくもりて、木を折り、家を破(る) 風いできぬ。人々あわてて、家共つくろひさわけども、風いよへ吹増りて、村里の家どもみな吹倒し、野山の竹木倒れ折れぬ。

⑭『宇治』巻14-2

今は昔、遍照寺僧正寛朝というふ人、仁和寺をもしりければ、仁和寺のやふれたるところ修理せさすとて、番匠どもあまたつどひて作り。

〈表13〉 クダク

	クダク (下二)	クダク (四)
角川	ある大きさのあるものが <u>小片</u> となる。	物を <u>細かい古片</u> または <u>粉末</u> とする。
日国2	物に力加わって <u>小さくこわれる</u> 。	物に <u>衝撃的な力を加えてこなごなにする</u> 。 <u>破壊する</u> 。
小学館	<u>固まっているものが、衝撃を与えられて細くなる</u> 。 <u>こなごなになる</u> 。	<u>固まっているものに衝撃を与えて、細かくする</u> 。打って、 <u>こなごなにする</u> 。
岩波	(物)が <u>こなごなになる</u> 。	《一つに固くまとまっているものをその機能を失うまで細かくこわしてしまう意》(物を) <u>こなごなにする</u> 。

以上の考察から、筆者が立てた仮説をもとに破碎語彙コボル・コボツ・ヤブル (下二・四) 意味の解釈が可能であると考えられる。

六 『今昔』の表記別クダクの用法

五の破碎語彙コボル・コボツ・ヤブル (下二・四) に対する考察を踏まえ、以下では現代日本語においてそれらの類義語であると考えられるクダク (下二、四) とはどのような相違点が見られるかを『今昔』の用例を分析し、検討していきたい。

六一 辞書での意味の記述

クダク (下二・四) についていくつかの辞書での記述を見ておきたい。なお、考察にかかわる範囲で抜粋し、〈表13〉にまとめた。

以上の四つの辞書の意味については、大同小異であり、便宜上クダクの意味をまとめる (波線が引いてあるところ) と、次のようである。

- 1) クダク (下二): 「物に力加わって小さくこわれる、こなごなになる」
- 2) クダク (四): 「物に力を加えて小さくする、こなごなにする」

クダク (下二、四) の定義をよく見ると、‘動作主の行為や変化のプロセスを経て、ある結果になる’という点に焦点が当てられていて、その主体と対象の性質についての詳細な記述はない。なお、小学館の「固まっているもの」や岩波の「一つの固くまとまっているもの」という点が注目されるが、具体的にはどのようなものを指すであろうか。コボル・コボツ・ヤブル (下二・四) の考察の結果を考えると、クダク (下二、四) の主体と対象を詳細に検討する必要があると考えられる。以下では、クダク (下二・四) の主体と対象の性質を分析し、コボル・コボツ・ヤブル (下二・四) と対比さ

(59)

せ、考察を行いたい。

六一 2 『今昔』に見られるクダク

まず、『今昔』で使われているクダク（下二）は、11例^{#11}あるが、多くが⑮⑯「肝・心クダク」のように心理的で抽象的なものが主体として現れている^{#12}。しかし、その中で⑰⑱のように「物理的に存在するものが小片となる」という意味で使われている用例も2例あった。

⑮卷14 29話 此レヲ見ルニ、心迷ヒ肝碎ケテ倒レ臥キ心地スレドモ、

⑯卷14 42話 「鬼也ケリ」ト思フニ、肝迷ヒ心碎テ、更ニ物ノ不思ズ。

⑰卷23 19話 僧都ハ虚寝ヲシタリケレバ、打任テ被夾テ後、寝延ヲ為ル様ニ打ウムメテ足ヲ夾ミケレバ、八ツノ胡桃一度ニハラへト碎ニケリ。

⑱卷31 20話 然テ、巖ヲ温カシテ、大キナル鉄鎚ヲ以テ打碎ケレバ、皆碎テ散々ニ
……。其時ニ、巖廉ノ碎ケル中ヨリ、百人許ガ音ニテ、同音ニ咲タリケレバ、

⑰⑱の「胡桃」と「岩」はどのような性質を有するものであろうか。これらには、一般に二つの性質があると考えられる。一つは、人間の手が加わっていない自然に作られたものであるということである。もう一つは、ほかにまじりもののない純粋なものであり、一種類だけの要素からなる物質であるということである。以下、そのような性質を「単体」と呼ぶことにする。

次に、『今昔』で使われているクダク（四）は、17例ありその中で複合動詞（打テ碎ク、切碎ク、抓碎ク）を除き、⑲⑳「身・肝クダク」のような形で使われているが、㉑のように「物理的に存在するものを小片にする」という意味で使われている用例も1例あった。

⑲卷14 30話 此レ善根也ト云ヘドモ、寺ノ物ヲ用セルガ故ニ、汝ガ身ヲ碎ケル也。

⑳卷17 22話 其ノ時ニ、盛考心迷ヒ肝碎ケテ、音ヲ挙テ泣キ悲ト云ヘドモ、

㉑卷23 24話 大キナル箭篠ノ節ノ許ヲ、朽木ナドヲ碎ク様ニ、手ヲ以テ押碎キ給ツルヲ見給ヘツレバ、

㉑の「朽木」も、「胡桃」と「岩」と同様に自然に作られたもので、単体である。以上をまとめると、クダクに接続する名詞は「自然に作られた単体」という性質を有すると考えられる。ここで、単体という概念を導入した理由について触れておけば、破碎語彙の語義について考察するにあたって、コボル・コボツ・ヤブル（下二・四）の主体な

〈表14〉

	徒	方	大	更	柴	源	枕	蜻	後	土	古	伊	竹	万
クダク (下二)	2					5		1			1	1		1
クダク (四)	2			1		8		2	1		1	1		4

〈表15〉

		クダク (下二)	クダク (四)
語彙	万	水 1	
	更	萩 1	
	徒	水 1	薪 1

いし対象に現れる「人為的に作られた構成物」とは異なる意味が認められたからである。しかし、上掲の三つの用例のみで判断するには少し用例が少ないと考えられるので、以下、『古典対象語い表』や和文資料（『寢覚』『狭衣』『古本』『宇治』）の用例から語彙を分析し、さらに考察を行いたい。

六一三 『古典対照語い表』

『古典対照語い表』でのクダク（下二、四）の分布は、〈表14〉のようである。

〈表14〉の中で抽象的なもの（例えば「心・肝」など）を除き、物理的なものだけを〈表15〉にまとめた。

これらの語彙の性質から読み取れる事実は、『今昔』の用例の考察の結果と同様であるということである。つまり、「水、萩、薪」は人間の手が加わって作られた構成物ではなく、自然に作られたもので、さらに一種類だけの要素からなる「単体」といえるものである。

六一四 和文資料におけるクダク

平安中期・後期の和文作品から、クダク（下二・四）がどのように使われているかを見ていきたい。コボル・コボツ・ヤブル（下二・四）と同様に、和文資料『寢覚』『狭衣』『古本』『宇治』の用例に見られる意味と、『今昔』に見られるクダク（下二・四）の意味とを比較しながら、検討したい。〈表16〉は、クダク（下二、四）の数を示したもので、この中で心理的で抽象的なものを除き、物理的なもののみを〈表17〉にまとめた。

『今昔』や和文資料のクダクの用例に見られた「胡桃、巖、石、水、波」等と〈表17〉の「波、朽木、岩、石」は、コボル・コボツ・ヤブル（下二・四）の主体ないし対象に

〈表16〉

	寢覚	狭衣	古本	宇治
クダク (下二)	6	1	0	6
クダク (四)	1	0	0	1

〈表17〉

		寢覚	狭衣	古本	宇治
語彙	クダク (下二)	波 1			数珠 1、朽木 1、車 1、岩 1
	クダク (四)				石 1

現れるものとは異なる性質を有すると考えられる。これらの基本的な共通点としては「単体」であることだ。しかし、「数珠」と「車」はどのように解釈すべきであろうか。先ず、それぞれの用例を見てみよう。

㊸『宇治』巻10-5

其牛を人のかりて、車かけて、淀へ遣けるに、樋爪の橋にて、牛飼あしく遣て、かた輪を橋よりおとしたりけるに、引れて車の橋より下におりけるを、車のおつると心得て、牛のふみひろごりて、たてりければ、むながいきれて、車はおちてくだけにけり。牛はひとり、橋のうへにとどまりてぞ有ける。

㊸『宇治』巻4-4

其時に、けいたう坊、齒をくひあはせて、念珠をもみちぎる。このわたし守、みかへりて、をこの事と思たるけしきにて、三四町ばかりゆくを、けいたう坊、みやりて、足を砂子に脛のなからばかりふみ入て、目もあかくにらみなして、数珠をくだけぬと、もみちぎりて「召し返せへ」とさけぶ。

「数珠」と「車」は、人為的なものであり、自然にできたものとは考えられない。なお、単体でもない。一方、これらは一つのまとまりを有し、なお、それらがまとまってはじめて、ある機能が生まれるのである（それぞれを形作っている部分・部品のみでは「車」でも「数珠」でもない）。また、ここでのクダク（下二）は、岩波の記述にもあったように、「その機能が失われる」という点に焦点が当てられているとも考えられる。㊸㊸と岩波の記述とを併せて考えてみると、「人為的に作られた構成物の場合、その機能が失われるという点に焦点が当てられる」ということが読み取れる。また、「(橋より下へ) 車はおちてくだけ」「(数珠をくだけぬと [ばかりに]) 念珠をもみちぎる」という表現からもわかるように、全体として「車」や「数珠」という1つの機能をもってま

とまっているものが、その形や機能が失われるほどにバラバラに粉々になることを表す場合に使われている。

以上の考察から、クダク(下二、四)は、主に「自然なもの(=単体)」に使われるが、「人為的なものでも、機能を有する1つのまとまりをもつもの」に使われ、それが元の機能や形を失ってしまう場合に使われることもあるというふうに考える方が妥当であろう。この2例に関してはより多くの用例で精査していかなければならないが、紙面上の制約もあるため、言及はここまでとし、なお、これについては、稿を改めて追及したい。

七 まとめ

本稿では、『今昔』において、「壊」という漢字について五つの注釈書における校異の一覧を提示し、訓のゆれのある語彙に限定して、今昔と同時代の和文資料における意味用法を比較しながら、各語の意味を考察し、それをもとにして『今昔』での訓を検討した。その結果をまとめると以下〈表18〉のようである。

〈表18〉

	意 味
コボル	「人為的に作られたもの(=構成物)」が主な主体として使われ、それが <u>3次元的なもの</u> と把握される場合に、それに焦点を当てその形(全体或いは部分)が損なわれる。
コボツ	「人為的に作られたもの(=構成物)」が主な対象として使われ、それが <u>3次元的なもの</u> と把握される場合に、それに焦点を当てその形(全体或いは部分)が他者の行為により損なわれる。
ヤブル (下二)	「人為的に作られたもの(=構成物)」が主な主体として使われ、それが <u>2次元的なもの</u> と把握される場合に、それに焦点を当てその形(全体或いは部分)が損なわれる。
ヤブル (四)	「人為的に作られたもの(=構成物)」が主な対象として使われ、それが <u>2次元的なもの</u> と把握される場合に、それに焦点を当てその形(全体或いは部分)が他者の行為により損なわれる。
クダク (下二)	①「自然にあるもの(=単体)」が主な主体として使われ、その形が損なわれる。 ②「人為的に作られた構成物で、一つのまとまりを持つもの」が主体として使われる場合は、ものの持つ <u>機能に焦点</u> を当て、その形と機能が損なわれる。
クダク (四)	①「自然にあるもの(=単体)」が主な対象として使われ、その形が他者の行為により損なわれる。 ②「人為的に作られた構成物で、一つのまとまりを持つもの」が主体として使われる場合は、ものの持つ <u>機能に焦点</u> を当て、その形と機能が他者の行為により損なわれる。

コボル・コボツ・ヤブル（下二・四）・クダク（下二・四）の用例に見られる語彙の意味分析では、未詳な部分がお残ったが、従来の研究とは異なる観点から、新たな解釈を提示した。この結論に基づき、冒頭で取り上げた校異がみられた『今昔』の六つの用例について、いずれの訓がより妥当であるかを判断したい。

- ①其レニ、此ノ寺ハ我レ死ナバ、後ニハ亦ノ日荒テ、人ホロサモ無ク成ナムトス。堂モ壊テ時ノ間ニ失セ、仏モ人ニ被盜レナムトス。
- ②見レバ、平下駄ノ破タル、旧尻切ノ壊タル、旧藁沓ノ切タル、此様共ホロへト泛レ出ヅ。
- ③其替リニハ、破タル平下駄ノ片足ヤ、旧尻切ノ壊タルヤ、旧藁沓ノ切タルナドヲコソ、求メテ籠テ被置ルト聞侍ツレ」ト語レバ
- ④今昔、鳥羽ノ村ニ大キナル橋有ケリ。此レハ、昔ヨリ桂川ニ渡セル也。其ノ橋壊レテ、人渡ル事無カリケリ。
- ⑤橋ノ壁ヲ壊テコソハ入レ奉ラメ。
- ⑥其時ニ、延鎮、將監ト同心ニシテ、カヲ合セテ、彼所ニ岸ヲ壊テ谷填テ、伽藍ヲ始テ建ツ。

①④⑤の「壊」は、文脈上、その主体（或は、対象）になっている「堂・橋・壁」について、実際には、そのどのような箇所を主体（或は、対象）として表現しているか（例えば、「堂」でも、どの部分か、3次元的な全体か、2次元的壁や屋根か）かは、必ずしも明確ではないところが残る。つまり、実際には、それぞれの箇所を、2次元的に把握したのか、3次元的に把握したのかが、判断し難いという問題が残る。そのため、①④では、コボルとヤブル（下二）の、⑤では、コボツとヤブル（四）の両方の可能性があり、確定しがたいところが残ると考える。

②と③の「壊」の訓については、主体である「旧尻切」を面（2次元）として捉えるのが一般的だと考えられるがゆえに、ヤブル（下二）の可能性が高いと推定される。

⑥の「壊」が「岸」を対象としているのは、多少問題を残す。なぜなら、「岸」は人口の構造物でも構成物でもないの、コボツの対象ではなく、むしろ、「自然」にある中身が均質なものであるから、クダクのほうであるようにも、思われる。しかし、一方で、「岸」は周囲の岸でない部分から切り離されている「単体」（独立した均質のもの）というものは異なるから、クダクが使用されていた「胡桃」や「朽木」とは性質が異なっている。用例では「岸」の一部を崩して谷を埋めるという意味であるから、「岸」という場所を構成している構造物を大きく切り崩すという動作であり、本文で見てきた構造物——人工の構成物ではないが——を大きくこわすという意味では、「コボツ」の方がふさわしいとみなすこともできる。「岸」が人工の構造物ではないという点で、課

題を残すが、後者の解釈の方が妥当性が高いように思われる。(もし、前者のクダクの方が正しいとなれば、『今昔』の「壊」の訓にクダクが当てられた例があるということになる。(しかし、『名義抄』には「壊」にクダクの訓はなく、「日国2」の「クダク」における主要辞書でもクダクにも「壊」の表記はないから、その点でも、やはり後者のコボツとみる解釈の方が勝ると思われる。)

今回の意味分析においては、それぞれ、コボル・コボツは人為的に作られた構成物の立体的空間に、ヤブル(下二・四)は人為的に作られた構成物の2次元の平面に、クダク(下二・四)は(主に自然に作られた)単体(ないし、人工物でも全体として1つの機能をもっていると把握されるもの(車・数珠)もある意味で単体といえよう)に、使用者の認識の焦点が当てられているということがわかった。しかし、〈表18〉の仮説は主に物理的なものに絞って考察した。それを基に、抽象的なものについて考察を加えていく道筋が得られたと思う。

いくつかの辞書にある「まとまっている」だけでは「ヤブル」「クダク」が同じ説明になり、相違が明らかにならない。また、同じく「固くまとまっているもの」「固いもの」でも「ヤブル」「クダク」の相違が不明確な上に、「車」「数珠」などを十分には説明できていない。拙論での解釈は、これらの辞書や橋本(2007)での解釈をわずかながら一歩前進させていると思われる。

なお、前述したように、コボル・コボツ・ヤブル(下二・四)の場合、その対象(主体)の認識の仕方を、どのように考えるべきか(空間・面)ということが新たな認知意味論の問題として浮上してきた。これら問題については今後の課題としたい。

〈表19〉 訓釈異動表(禹 吳穎作成)

コボル：11例							
巻	話	本文(新大系)	旧大系本	新大系本	旧全集本	新全集本	集成本
2	3	居タル所モ悉ク朽チ壊タリ。					
2	15	其ノ時ニ崩レ壊レタテ塔有リキ。					
2	17	一人ノ人有テ行テ此レヲ見ニ、塔少シ壊レタル所有リ。					
2	18	其ノ塔、年久ク成テ崩シ壊レタリキ。					
①	19	23 堂モ壊テ時ノ間ニ失セ、仏モ人ニ被盜レナムトス。	ヤブル				
	19	23 立藪□モ壊レテ荒ヌレバ、見ル人モ皆哀ニ悲ク思フ。					
②	28	30 見レバ、平足駄ノ破タル、旧尻切ノ壊タル、旧藁沓ノ切タル、			ヤブル	ヤブル	ヤブル

(65)

③	28	30	破タル平足駄ノ片足ヤ、旧尻切ノ壊タルヤ、旧藁沓ノ切タルナドヲコソ、			ヤブル	ヤブル	ヤブル
		30	4	然レバ、様悪ク壊タル寝殿ノ片隅ニ、幽ニテゾ独り居タリケル。				
④	31	2	其ノ橋壊レテ、人渡ル事無カリケリ。	ヤブル				
		31	2	此ノ橋壊レテ人皆河ヨリ渡ル事ヲ歎テ、往還ノ人ヲ助ケムガ為ニ、				

コボツ：13例

巻	話	本文(新大系)	旧大系本	新大系本	旧全集本	新全集本	集成本
2	25	此ノ社ヲ壊チテ厠ノ内ニ投入ム」ト誠ノ心ヲ致シテ礼拝シテ申ス。					
4	5	其ノ後、無益ノ事也トテ地獄ヲ壊チ給テケリトナム語り伝ヘタルトヤ。					
4	12	亦、軍ヲ遣シテ神ノ社ヲ壊チ、口河ト云フ大河ニ流シツ。					
4	17	雖然モ、相ヒ構テ門戸ノ本ヲ穿チ壊テ密か蜜ニ入ヌ。					
5	17	此ノ墓ヲ壊テ火ヲ付ケテ皆焼キ殺シテム」ト。					
11	11	寺塔ヲ破リ壊テ正教ヲ焼キ失セ、法師ヲ捕テ令還俗ム。					
⑤	11	22	藩ノ壁ヲ壊テコソハ入レ奉ラメ。	ヤブル		ヤブル	ヤブル
⑥	11	32	彼所ニ岸ヲ壊テ谷填テ、伽藍ヲ始テ建ツ。			クダク	クダク
	14	4	然レドモ、大臣不憚ズ墓ヲ壊チ地ヲ堀テ見ルニ、				
	14	4	其ノ約ヲ不違シテ墓ヲ壊ツニ、何ノ故□蛇此ヲ不去ザルゾ」ト。				
	14	44	行ヒ畢テ、此ノ度ハ、墓ヨリ始メ皆壊テ同ジ所ニ積置ツ。				
	20	44	「我が中垣ヲ壊テ、我が方ヨリ將出セ」トナム云テ来ヌルゾ」ト云フ。				
	31	1	「我等、速ニ彼ノ新宮ニ行テ宝殿ヲ壊テ、御聖体ヲ取テ、				

ヤブル(下二)：16例

巻	話	本文(新大系) = 他の注釈書の訓も同様である。	
6	1	如此キ獄ノ壊ヌル時ニ、皆心ニ随テ方々ニ逃ケ去ヌ。	
6	14	此ノ雷ノ震カス柱、壊レテ迸テ張亮ガ額ニ当ル。	
iii	7	25	亦、臭キ香無ク身壊ル、事無シ。
	7	28	呉ノ江ノ中流ヲ渡ル間、俄ニ船壊レヌ。

	7	28	前ニハ江ヲ渡ルニ、船壞レテ水ニ入ルト云ドモ死ル事無シ。
	10	34	年来ノ行ヒモ忽ニ壞レテ、念ジ不可過ズ。
	11	1	然レバ、其軍壞ヌレバ、御方ノ軍弥ヨ責寄テ、守屋ガ頭ヲ斬ツ。
	12	1	其ノ後、數百歳ヲ送ルト云ヘドモ、塔壞ル、事無シ。
i	12	14	河ノ水荒クシテ、筏ノ繩切レテ壞レニシカバ、
	12	24	而ルニ、其ノ仏堂共モ壞レ、仏モ朽チ失セ給ヒニケレバ、
	12	24	其ノ後ハ、壞ルレバ知識ヲ引テ修理ヲ加フ。
	19	5	寝殿ハ殿ノ内ノ人ノ焼物ニ罷成テ、壞レ候ヒニシカバ倒レ候ニキ。
ii	19	30	其ノ人、百濟国ノ壞レケル時ニ、事ノ縁有ルニ依テ、
	23	20	彼ノ寺ノ壞タル所ニ、修理セントテ、
	24	27	只煙屋許残タルニ、此人々壞タル縁ニ居並テ、
	26	17	薄綿ノ衣ニツ許、青鈍ノ指貫ノ裾壞タルニ、
ヤブル (四) : 16例			
卷	話	本文 (新大系) = 他の注釈書の訓も同様である。	
	1	11	「若此ノ起請ヲ壞テ供養スル者有ラバ、国ノ境ヲ可追」ト告廻シテ後チ、
iv	2	12	我レ身ヲ棄ムト思フニ、自カラ身ヲ壞ルニ不能ズ。
	4	40	母泣タク、形ヲ壞ラム事ヲ惜ムト云ヘドモ、
	5	2	帳ノ帷ヲ食ヒ壞テ内ヲ見レバ、玉光ル女、一人乗りタリ。
	6	1	此ノ獄門ヲ踏ミ壞テ入給テ、利房ヲ取テ去給ヒヌ。
	6	1	金ノ色ノ光ヲ放テ虚空ヨリ飛来テ、獄門ヲ踏ミ壞テ入[]チ佈レ給ヒケリ。
	12	1	我レ、此レヨリ後、更ニ此ノ塔ヲ壞ル事不有ジ」ト。
	12	1	「汝チ、何許ノ悪心ヲ以テ此ノ塔ヲ度々壞ルゾ」ト。
	12	1	我レ此ノ語ニ依テ度々塔ヲ壞レリ。
	12	13	「定メテ此レ、仏ヲ盜テ壞リ奉ル也。
	12	33	「吉タシ、不打ジ」ト云テ押シ壞ツ。
	16	4	何ゾ仏ノ御身ヲ壞リ奉ル」ト云フニ、
	20	34	大キナル風出来ヌ。木ヲ折り屋ヲ壞ル。
	24	6	此ク皆殺シニハ被擲ナムカ」ト怖シク思テ、押シ壞ツ。
	24	29	「何ノ故有テ、此ル僻事ヲ申テ事ヲ壞ラムト為ルゾ」ト、勸発シ被仰ケル。
v	28	21	此ノ起請ヲ壞ツル事ハ、糸便無キ事ハ也。

注

- 以下では特に断らない限り、用例本文は原則として新大系本に拠り、用例数は岩波の小峯索引を利用して新大系本で確認した訓に拠る。
- 橋本 (2007) では、「コホル・コホツ」で代表させている。本稿の「コボツ・コ

ボル」との相違はない。

- 3 橋本(2007)は、この注記を重視した。
- 4 岩波には、「こぼれ」と表記されていて、《コボチ(毀)と同根》と書いてある。なお、「こぼち」、「やぶれ」、「やぶり」と表記されている。
- 5 <表19>「訓釈異動表」参照
- 6 複合動詞の場合、各語(コボル・コボツ・ヤブル(下二、四))の本来の意味が別の動詞の意味に影響され、意味の拡張が生じるからである。なお、複合動詞と共起する語彙については、波線を引いて表示した。
- 7 表8の抽象的なものに関しては「*」をつけて表示した。以下、同様である。
- 8 一般に抽象的なものから物理的なものへの意味拡張は考え難い。抽象的なものについては、物理的なものの分析の結論が出てから簡単に取り上げることにする
- 9 この中には、「溢れる」の意を表すものも含まれているので、それは除外し<表10>にまとめた。
- 10 抽象的なものに関しては、4節で少し触れた。<表12>には、抽象的なものは省略し、物理的なもののみを表示したため、<表11>と語彙の数が異なる。
- 11 用例から題字は除き、表記した。クダク(下二、四)1例ずつある。
- 12 紙面上の制約もあり、必要な用例のみを取り上げることにする。

参考文献

- 東節夫・塚原鉄夫・前田欽吾(1956)『更級日記総索引』武蔵野書院
- 山田考雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄(1959—1963)『日本古典文学大系今昔物語集1—5』岩波書店
- 渡邊綱也・西尾光一(1960)『宇治拾遺物語(日本古典文学大系)』岩波書店
- 葉安太郎(1961)『大鏡の研究 上巻 本文篇』桜楓社出版
- 木下正俊(1964)「「溢す」と「毀つ」」『萬葉』萬葉學會
- 阪倉篤義(1964)『夜の寝覚(日本古典文学大系)』岩波書店
- 青木伶子(1965)『方丈記総索引』武蔵野書院
- 三谷栄一・関根慶子(1965)『狭衣物語(日本古典文学大系)』岩波書店
- 榎原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美(1968)『枕障子総索引』右文書院
- 山内洋一郎(1969)『古本説話集総索引』風間書房
- 馬淵和夫・国東文麿・今野達(1970—1975)『日本古典文学全集 今昔物語1—4』小学館
- 上代語辞典編修委員会(1971)『時代別国語大辞典上代編』三省堂
- 大野晋・辛嶋稔子(1972)『伊勢物語総索引』明治書院
- 阪倉篤義・高村元継・志水富夫編(1974)『夜の寝覚総索引』明示書院

- 塚原鉄雄・本守英・神尾暢子共編 (1975)『狭衣物語彙索引』笠間書院
- 増田繁夫・長野照子 (1975)『宇治拾遺物語総索引』清文堂出版
- 阪倉篤義・本田義憲・川端義明 (1978～1985)『新潮日本古典集成 1～4』新潮社
- 時枝誠記 (1979)『徒然草総索引』至文堂
- 佐伯梅友・伊牟田経久 (1981)『かげろふ日記総索引』風間書房
- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎 (1982)『岩波古語辞典』岩波書店
- 中村幸彦ほか編 (1982—1999)『角川古語大辞典』角川書店
- 田中祝夫 (1983)『古語大辞典』小学館
- 室町時代語辞典編修委員会 (1985)『時代別国語大辞典室町時代編』三省堂
- 鈴木敏夫 (1986)『大漢和辞典』大修館書店
- 片桐洋一 (1990)『後撰和歌集』岩波書店
- 渡辺実 (1991)『枕草子』岩波書店
- 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出夫・藤井貞和・今西祐一郎 (1993)『源氏物語 1～5』岩波書店
- 迫野虔徳 (1996)『文献方言史研究』清文堂
- 西端幸雄 (1997)『後撰和歌集総索引』和泉書院
- 堀内秀晃・秋山虔 (1997)『竹取物語 伊勢物語』岩波書店
- 今野達 (1999)『新日本古典文学大系 今昔物語集 1』岩波書店 (巻1～5)
- 小峯和明 (1999)『新日本古典文学大系 今昔物語集 2』岩波書店 (巻6～10)
- 池上洵一 (1999)『新日本古典文学大系 今昔物語集 3』岩波書店 (巻11～16)
- 小峯和明 (1999)『新日本古典文学大系 今昔物語集 4』岩波書店 (巻17～25)
- 森正人 (1999)『新日本古典文学大系 今昔物語集 5』岩波書店 (巻26～31)
- 小峯和明 (1999)『今昔物語集索引』岩波書店
- 藤井貞和・今西祐一郎 (1999)『源氏物語索引』岩波書店
- 馬淵和夫・国東文麿・今野達 (1999～2002)『新日本古典文学全集 1～4』小学館
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編 (2001)『日本国語大辞典 第二版』
- 橋本博幸 (2007)「平安・鎌倉時代における動詞コホル・コホツの意味」『文芸研究』
日本文芸研究会

【付記1】本稿は、学習院大学大学院の次の授業における調査を元にしてまとめたものである。「平成21年日本語史特殊研究(安部清哉教授)」。なお、各語の語義解釈においては安部清哉教授(学習院大学)のご助言によったところがある。